

令和7年度病害虫発生予察情報 発生予報第9号(9月)

令和7年9月12日

発表：福島県病害虫防除所

【注意が必要な病害虫】

果樹	■果樹共通：果樹カメムシ類 (令和7年7月10日付け注意報参考) -① ■リンゴ：リンゴ褐斑病 (令和7年6月30日付け防除情報参考) -② ■モモ：モモハモグリガ-②
野菜花き	■野菜花き共通：ハスモンヨトウ (令和7年8月28日付け注意報参考) -① ■野菜花き共通：オオタバコガ -③ アスパラガス：褐斑病、ハダニ類 -③



病害虫防除所
HPは
←こちらから



病害虫に関する
防除対策の
ページは
←こちらから

※ 上記の表に記載された病害虫は、下記の①～③に該当します。

注) ①現状において、注意報レベルの防除を要すると判断された病害虫

②「1 主な病害虫の発生予報」のうち、予察調査の結果、発生時期が「やや早い」、発生量が「やや多い」と予測された病害虫の中で特に懸念される病害虫

③「1 主な病害虫の発生予報」以外で、調査の結果、県全域的に発生が多く、問題になると判断した病害虫

1 主な病害虫の発生予報

(1) 果樹

リンゴ、モモは8月中下旬、ナシは9月上旬の調査結果に基づき発生量を評価した。

作物名	病害虫名	地方	発生時期	発生量	予報の根拠	防除上注意すべき事項
リンゴ	斑点落葉病	全域	—	平年並	新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する。
	褐斑病	県北	—	平年並	県北・会津地方では8月中下旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年並であった(±)。県中・県南地方では、新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや高かった(+)。発病葉率は全域で平年並であった(±)。	現在、本病の二次感染期であるので、感染拡大を抑制するため天候に注意しながら、散布間隔があきすぎないように薬剤散布を実施する(令和7年6月30日付け令和7年度病害虫防除情報(リンゴ褐斑病)参照)。
		県中・	—	やや多い		
		県南 会津	—	平年並		
	炭疽病	全域	—	平年並	果実での発生ほ場割合は平年並であった(±)。	降雨が多い場合は9月中旬に防除を行う。
	キンモンホソガ	中通り 会津	—	やや多い 平年並	新梢葉での発生ほ場割合は、中通では平年よりやや高く(+)、会津では平年並であった(±)。	本種の発生が多い場合は、9月中旬頃に防除を行う。

リンゴ	シンクイムシ類	全域	—	平年並	ナシヒメシンクイ・モモシンクイガの果実被害の発生は場割合は平年並であった（±）。スモモヒメシンクイの果実被害の発生は場割合は県北・会津地方は平年並（±）、 県中・県南地方は平年よりやや高かった（+）。	シンクイムシ類の発生が多い場合は、9月中旬頃防除を行う。被害果は園内に放置せず適切に処分する。
モモ	せん孔細菌病	中通り	—	やや少ない	新梢葉、果実での発生は場割合は平年よりやや低かった（-）。	秋雨や台風の襲来が予想される時期であるため、天候に注意しながら秋期防除を必ず実施する。
	モモハモグリガ	中通り	—	やや多い	新梢葉の発生は場割合は平年よりやや高かった（+）。	今後の気温が2℃高く推移した場合、本種の第7世代の防除適期は9月5半旬頃と推定されており（果樹研究所、9月9日現在）、発生が多いほ場では、越冬密度を低下させるために収穫後でも防除を徹底する。
ナシ	黒星病	全域	—	平年並	新梢葉での発生は場割合は平年並であった（±）。	翌年の芽基部病斑の発生を抑制するため、りん片生組織の露出が多くなる10月上旬～11月上旬頃に秋期防除を実施する（令和4年度普及に移しうる成果参照）。
	ナシヒメシンクイ	全域	—	平年並	9月上旬における「豊水」果実被害の発生は場割合は、平年並であった（±）。	ナシの果実被害や近隣のモモやウメ等の核果類の芯折れの発生状況に注意し、防除を徹底する（発生が懸念される病虫害の欄参照）。
果樹共通	カメムシ類	県北・会津・浜通り北部 県中・県南・浜通り南部	— —	多い やや多い	7月5半旬～8月6半旬のフェロモントラップにおける誘殺数は、県北・会津・浜通り北部で平年より多く（+）、県中・県南・浜通り南部では平年並であった（±）。東北地方の1カ月予報（令和7年9月4日発表）によれば、向こう1カ月の平均気温は高いと予想されている（+）。	第一世代成虫の園地への飛来状況をよく確認し、多数の飛来が確認された場合、薬剤散布を実施する（令和7年7月10日付け令和7年度病虫害発生予察情報注意報第1号参照）。

注）予報の根拠の中で（+）は多発要因、（-）は少発要因、（±）は平年並要因であることを示す。

2 発生が懸念される病害虫

リンゴ	■ ナシマルカイガラムシ 県北地方や県中・県南地方では、8月中下旬の調査でナシマルカイガラムシの果実被害が確認されています。また、昨年は秋期に本種の果実被害が増加した事例がありました。今後、気温が2℃高く推移した場合、本種第3世代のふ化開始は、9月2半旬頃と予測され、ふ化盛期は9月5半旬頃と推定されています（果樹研究所、9月9日現在）。すでに本種の被害が確認されているほ場や例年発生が認められるほ場では、第3世代幼虫の防除を徹底しましょう。
ナシ	■ ナシヒメシクイ 本種第5世代幼虫は、9月下旬頃まで発生することがあるので(令和3年度農業総合センター参考となる成果 http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/504234.pdf)、「あきづき」や晩生種に対しては、9月中下旬にも防除を実施しましょう。
モモ	■ モモせん孔細菌病 8月中旬の新梢葉での発生ほ場割合は平年よりやや少ない状況ですが、9月は台風の襲来が多い時期にあり、今後の天候次第では、新梢葉での発生が増加するおそれがあります。本病は秋期に降水量が多いと翌春に春型枝病斑の発生が多くなる傾向にあるため、収穫が終了した園では降雨前の秋期防除を徹底し、越冬病原菌密度の低下を図りましょう。
果樹共通	■ 果実吸蛾類 果実が成熟し始めると、果実吸蛾類の成虫が夜間に果樹園に飛来し、果実を吸汁加害することがあります。8月中下旬の調査において、ナシ・リンゴでの果実被害が確認されています。果実吸蛾類は山林原野に生息しているため、山林原野に近いほ場では注意が必要です。対策として、多目的防災網等の物理的防除、糖蜜（砂糖 200 g、酒 200cc、酢 200cc、水 1400cc を混ぜ合わせたもの）を誘引源とした食餌トラップが有効です。 ■ ハスモンヨトウ 病害虫防除所の野菜、花き調査ほ場に設置したフェロモントラップの誘殺数は、浜通り及び中通り地方において8月3半旬以降から誘殺数が急増しています。9月上旬の調査において、果樹においてもリンゴやモモ、ブドウ等での葉やリンゴ果実での食害が確認されています。今後発生が多くなることが懸念されるので、ほ場をよく確認して若齢幼虫期に捕殺してください。
野菜、花き共通	■ ハスモンヨトウ フェロモントラップの誘殺数は、浜通り及び中通り地方において8月3半旬以降から誘殺数が急増しています。平年の誘殺ピークは9～10月に見られることから、今後も発生量が増加し、被害が拡大するおそれがあるため注意が必要です。 また、9月1日に実施した安達、田村地域の巡回調査では、ピーマン及びなすほ場で、葉や果実の食害が確認されていますので、注意しましょう。 ■ オオタバコガ フェロモントラップでの誘殺数は、県内複数地点において8月5半旬以降から誘殺数が急増しています。平年の誘殺ピークは概ね8～9月頃に見られることから、今後も被害が拡大するおそれがあるため、注意が必要です。
アスパラガス	■ 褐斑病 9月4日に実施した会津地域の巡回調査の結果では、褐斑病の発生ほ場割合が例年（2023、24年の平均）に比べ高くなりました。本病は、発病前からの予防散布が効果的であるため、定期的な予防散布を行いましょう。また、通風を図るため、不要な茎葉は整理を行い、過繁茂を避けましょう。 ■ ハダニ類 ハダニ類による若茎の被害（食害）は、例年に比べて発生ほ場割合が高くなりました。主要寄生種はカンザワハダニでした。薬剤防除の際は、擬葉内部までしっかりと薬剤がかかるように散布しましょう。また、同一系統の薬剤を連用すると、薬剤感受性が低下するおそれがあるため、IRACコードの異なる薬剤を組み合わせ、ローテーション散布を実施しましょう。ほ場周辺の雑草や、刈り取り後の残さは寄生源となるため、速やかにほ場から持ち出して適切に処分しましょう。